

植物と人々：南アジアの 園芸に関わる諸カースト巡り①

大橋 正明(国際社会文化学科)

序論：植物と南アジアの人々の関わり

当たり前のことだが、植物は南アジアでも人々の日々の生活において極めて重要だ。

インドとネパールの人々に多いヒンドゥー教では、無数の花や花びら、花輪が神に供えられる。大きな寺院の前や路上では、マリーゴールド(キク科、*Tagetes sp.*)の花やその花輪がいつも売られている。ヒンドゥー教徒の家の中庭には、トゥルスイー(シソ科のカミメボウキ、*Ocimum sanctum*)が壇のなかで大切に育てられ、豊饒と幸運をもたらす女神のラクシュミーの化身として礼拝の対象となるだけでなく、時には咳止めの薬草として役立てられる。またベンガル地方では結婚の数日前に親戚が集まって、新婦と新郎にカレー粉を黄色くしているウコン(ショウガ科、*Curcuma domestica*)のペーストを体に塗ってお清めをする。ウコンには、消毒作用や保存作用があると考えられているからだろう。そして結婚式では、オレンジ色のマリーゴールドや白いアコン(ガガイモ科、*Calotropis gigantean*)の花輪が新婦や新郎の首にかけられ、儀式はバナナの幹を四方に立てた神聖な領域で執り行われる。

パキスタンやバングラデシュの人々に多いイスラーム教は、何となく植物や花との関係が薄いように思えるが、同じ風土のなかで暮らしているのだから、ヒンドゥー教の場合とほとんど同じだ。さらにイスラーム建築において花園は不可欠だし、タージマハルやデリー城などの大規模建築物の壁には、植物が象嵌で描かれている場合が多い。人間や動物のデザインは偶像崇拝につながるという理由からだ。ちなみにその植物文様が、日本に唐草模様として伝わり、風呂敷などで使われている。その花園にバラは最も好まれる植物で、ムガル王朝の初期の16世紀に、ペルシアから入ってきたダマスク・ロー

ズ(バラ科、*Rosa damascene*)という種が起源だと言われている(西岡、2003、p. 236)。このバラの花から香水や食用のバラ水が造られ、イスラーム教徒の生活に彩りを添えている。

ヒンドゥー教徒であれイスラーム教徒であれ、南アジアの人々は、日本の私たちから見れば毎日毎食カレーを食べている。カレーとは何かという問いに、筆者は「日本のショウユとミソ」と答えるようにしている。大豆と塩を原料に発酵させたこの二つの調味料は、吸い物、煮物、炒め物、焼き物、生ものなどのオカズの味付けに、さまざまな形で用いられる。同様にカレーも、多種類のスパイスが食材、季節や天気、家庭、体調、そして作り手の好みなどに応じて巧みに調合されて、深い味付けを生み出している。タマネギ、ニンニク、ショウガに加えて、先に述べたターメリック、刺激的な芳香を出すクミンやコリアンダー、辛味の胡椒や唐辛子、酸味を出すタマリンド(マメ科、*Tamarindus indica*)など、百種類あまりの植物スパイスと、マスタードやココヤシ(ヤシ科、*Cocos nucifera*)などから絞る油が、カレーの主要な素になっている。

酒には米や麦などの穀物から醸されるものもあるが、植物から作られるもののほうが多い。インドの西ベンガル州やビハール州、ジャールカンド州の農村で一般的なのは、ヤシ酒とマフアー酒だろう。サトウナツメヤシ(ヤシ科、*Phoenix sylvestris*)の幹に刻みを入れるか、オウギヤシ(ヤシ科、*Borassus flabellifer*)の雄花の花梗の先端を切って、漏れ出てくる甘い樹液を丸い土壺に集めたものが夕方には自然に発酵して、ビールとカルピスの中間のような白濁した軽い酒になる。サトウナツメヤシの木の下には、その葉柄と麦わらで作った粗末な小屋があり、夕方になると仕事を終えた男たちが集まってくる。ちなみにこれらの樹液を朝のうちに集めて煮詰めると、黒砂糖になるので、酒を飲まないイスラーム教徒の多いバングラデシュでよく作られている。またマフアー(アカテツ科、*Madhuca India*, *Bassia latifolia*)の花を乾燥させ、黒砂糖と混ぜたものを発酵させて蒸留したものは、まさに焼酎のようだ。

こうした植物の生産、加工、流通に関わる南アジアの人々の数は少なくな

い。しかもそれを職業として行っている場合には、特定の職能集団、ジャーティと呼ばれるカーストとなっている場合も少なくない。例えばベンガル地方では、花輪造りはマラカルという姓で呼ばれる人が多い。花卉や蔬菜の栽培や庭園の世話をする人は、インドで広くマーリーと呼ばれる。ビハール州では、油絞りの人々はテーリー、酒つくりやその流通はパーシーと呼ばれる人々が担っている。

本研究は、これらの一般的には低い地位に置かれるカースト集団一つ一つに焦点を当て、その人々の素顔や生活の様子を植物と関係の深い伝統的職業と関連させながら描くことによって、南アジアにおける植物と人々の関係を新たな角度から掘り下げ、現代社会のあり方を見直すことを目指している。今回はカーストに関する説明に続いて、少なくとも一つのカーストについてまとめるつもりである。

参考文献：

- 西岡直樹. サラソウジュの木の下で：インド植物ものがたり. 平凡社. 2003.
篠田隆. インド清掃人カースト研究. 春秋社. 1995.
戸川昌彦. 花輪作りカーストの娘. 『文芸長良』第4号. 2001.
大橋正明. 「不可触民」と教育：インド・ガンディー主義の農地改革とブイヤーンの人びと. 明石書店. 2001.